公益社団法人
日本語教育学会
Association for Japanese Language Education

2024 年度第1回支部集会【九州・沖縄支部】

主催:公益社団法人日本語教育学会

日　　時：2024 年 7 月 20 日（土）10：30～16：00（受付開始：10：00）

会　　場：福岡県中小企業振興センター（〒812-0046　福岡県福岡市博多区吉塚本町 9-15
福岡県中小企業振興センタービル 3 階）

アクセス：https://www.joho-fukuoka.or.jp/access.html
※本支部集会参加者用の無料駐車場はございません。振興センター周辺にコインパーキングがございますので、ご利用ください。
https://www.joho-fukuoka.or.jp/contents/access/parking_20240607.pdf

参 加 費：1,000 円（マイページより事前参加登録時に支払い）　　定員：100 名

対　　象：日本語教育に関心のある方ならどなたでもご参加いただけます。

申込締切：2024 年 7 月 11 日（木）23：59 （定員に達した場合は，締切日以前に締め切ります）

申込方法：日本語教育学会マイページ から事前参加登録をお願いいたします。

問 合 先：公益社団法人日本語教育学会　支部活動委員会
E-mai l ：shibu@nkg.or.jp　TEL：03-3262-4291（平日 9～18 時のみ）

◆支部集会日程◆

10:00	受付開始(3 階)		
10:30-12:10	口頭発表(3 件)	【3 階 301 教室】	
13:00-14:30	ポスター発表 (6 件)	【3 階 301 教室(2 件)と 302 教室(4 件)】	14:00-14:30 の 30 分間はポスターと交流広場を同時実施
14:00-15:30	交流ひろば (8 件)	【3 階 301 教室(8 件)】	
16:00	閉会		

公益社団法人
日本語教育学会
Association for Japanese Language Education

口頭発表 【10:30-12:10／3 階 301 教室】

※本発表は査読審査を経た学会発表です。詳細は予稿集原稿をご覧ください。

① 10:30-11:00
地方公共団体と企業が費用分担する日本語教室の開設プロセス
深江新太郎（九州大学大学院生）

② 11:05-11:35
日常談話における「こう」の多義性と意味・機能
鹿嶋恵（崇城大学），西村史子（ワイカト大学）

③ 11:40-12:10
地域の日本語指導体制づくりをめざした小学校と日本語教育の連携
小川佳子（大阪大学），樋口尊子（大阪樟蔭女子大学）

休　憩……【12:10-13:00】

※口頭発表終了後、301 室は交流広場（14:00 開始）の設営を行うため、
参加者の皆様には一時退室をお願いいたします。
ご理解、ご協力、お願いいたします。

ポスター発表……【13:00-14:30／3 階 301 室（2 件），302 室（4 件）】

※本発表は査読審査を経た学会発表です。詳細は予稿集原稿をご覧ください。

ポスター発表【301 室】13:00-14:30	**①言語教育観を深める日本語コースデザイン** **－非母語話者日本語教師のための訪日研修での実践－** 長坂水晶（国際交流基金），清水まさ子（国際交流基金） **②地域日本語教育の対話活動はどう捉えられているのか** **－地域日本語教育の団体 X と日本語学校に通う A さんの語りから－** 友宗朋美（筑波大学大学院生）

ポスター発表 【302 室】 13:00–14:30	**③日本語学習者における受身と「～てしまう」の使い分け** **―学習者独自の文法規則を考える―** 黒田弘美（長崎外国語大学） **④小中学校・地域日本語教室・日本語学校での日本語教育実習の比較** **―大学での日本語教師養成の実態―** 樋口尊子（大阪樟蔭女子大学），松本理美（大阪樟蔭女子大学） **⑤実習生は日本語教師の役割や求められる力をどのように捉えたか** 古川敦子（津田塾大学），渋谷実希（津田塾大学） **⑥レベル別日本語書籍の普及活動** **―公共図書館で所蔵する際の課題―** 柴田あづさ（九州大学），橋本直幸（福岡女子大学）

交流ひろば……【14:00–15:30／3 階 301 教室】

※「交流ひろば」は，日本語教育とその関連領域の話題についての参加者相互の情報共有および同じ興味や問題意識を持つ者同士のネットワーク作りを目的としています。審査を経た学会発表ではありません。

「交流ひろば」への出展は，学会員・非会員に限らずどなたでも可能です。

交流広場 【301 室】 14:00–15:30	**❶日本語教師の管理運営業務リストの作成と現場での活用** 中川健司（横浜国立大学），平山允子（日本学生支援機構東京日本語教育センター），安中浩美（アン・ランゲージ・スクール成増校），古川嘉子（帝京大学） 日本語教師は，所属機関で，授業実践以外にも学生対応や時間割作成等の様々な管理運営業務を担っています。本出展では，出展者が行った管理運営業務リスト作成の試みと，日本語学校の業務改善のために業務リストを活用した事例について報告したうえで，それぞれの現場での管理運営業務の実状や改善のためにどのようなことができるのかについて意見交換を行いたいと考えています。 **❷筑波大学　日本語・日本事情遠隔教育拠点の紹介** 岩崎拓也（筑波大学） 筑波大学 日本語・日本事情遠隔教育拠点では、日本語教育のための学習コンテンツやツールを公開しています。2023 年度に公開したコンテンツの使い方の紹介を中心に、現場での活用法や今後の協力などについて一緒に考えていきたいと考えています。使い方を知りたいなども含めて興味のある方はぜひお越しください。

❸日本語学校の留学生と日本人高校生による異文化間交流活動

島由佳（高校教員）

現在、高校で英語の教員をしていますが、日本語学校で日本語教師として勤務していた経験を活かして、高校生と日本語学校の留学生による異文化間交流活動を行っています。今回は、高校の数学科および英語科での実践を紹介します。

❹社会サービスに関する来日前の事前講座に関する取り組み（スリランカの大学を事例に）

島由季（社会保険労務士）

昨年，日本での就職を控えたスリランカの大学生を対象に，渡航後に必要となる日本での行政手続きや税金等の社会サービスについて講義をしました。スムーズに日本社会に馴染むために、事前学習を行う必要性を考えていきたいと思います。興味のある方はぜひお越しください。

❺学習者の発話を引き出す楽しい授業を目指して

― 日本語中上級クラス向け教科書の開発 ―

北村綾子（福岡外語専門学校），施光恒（九州大学）

私たちは，中上級学習者対象の理想の日本語教科書の作成を目指しています。設問形式や配慮表現への目配り，学習者だけでなく教師も楽しめるトピックの選定など，教室での発話を引き出す工夫を随所に凝らし，授業がより活気に満ちたものとなるよう改良を重ねています。理想の教科書について，多くの方々と意見交換ができれば大変嬉しいです！

❻レベル別日本語読み物の普及と活用促進を目指した日本語読書会の開催

― 令和5年度「福岡よか未来プロジェクト」採択事業として ―

柴田あづさ（九州大学），橋本直幸（福岡女子大学），川邊理恵（福岡大学），米田留美（NILS Anne、福岡日本語学校）

私たちは，令和５年度「福岡よか未来プロジェクト」の助成を受け，日本語学習者と，日本語教員およびボランティアを対象に福岡市内の４つの公共施設でレベル別日本語読み物の普及を目指した日本語読書会を開催しました。また，令和５年度福岡県学校図書館協議会小・中・義務教育学校及び特別支援学校司書合同研修会ではこの読み物の展示を行いました。今後はこの活動を福岡県全域，そして，九州各県に広げていきたいと思っています。私たちの活動に興味をお持ち頂けましたら，ぜひお越しください。

❼多読を促進する取り組みと多読授業のアセスメント

長野 真澄（岡山大学）

出展者は多読活動が日本語学習者に与える影響を検討しながら、多読授業の改善を目指しています。出展では、多読授業の実践を紹介するとともに、多読を促進するための取り組みやアセスメントの在り方について、意見交換ができればと考えています。皆様と多読について幅広くお話しできると嬉しいです。

	❽生活者としての外国人に対する韓国語教育 **― 釜山広域市の事例から ―** 鴈野恵（筑紫女学園大学），田美京（釜山グローバル都市財団） 近年，韓国は在住外国人の増加が著しく，日本同様に生活者としての外国人への韓国語教育のあり方について各所で模索が続けられています。本出展では，釜山市での取り組みについて，自治体，外国ルーツの子どもの韓国語教育，就労者向け韓国語研修という３つの切り口で報告します。

閉　会……【16:00】

〔2024年度第 1 回支部集会（九州・沖縄支部）口頭発表①〕

地方公共団体と企業が費用分担する日本語教室の開設プロセス

深江新太郎

本研究の目的は，地方公共団体と企業が費用面も含めて連携した日本語教室の開設プロセスを提示することである。地域日本語教育研究は，これまで日本語教室を主たる対象としてきたが，「日本語教育の推進に関する法律」が 2019 年に施行された現在，国の社会統合政策，地方公共団体の施策まで研究領域を広げる必要がある。国の社会統合政策をマクロ領域，地方公共団体の施策をメゾ領域，日本語教室をミクロ領域と捉えた場合，本研究はメゾ領域の研究である。考察は Z 県 X 市，W 町の事例に基づいたアクション・リサーチにより行った。結果として X 市，W 町は企業と費用分担する日本語教室を開講し，次の開設プロセスを見出すことができた。（1）地域課題の明確化，（2）中心となる企業への意向・ニーズのヒアリング（3）域内の企業全般への意向・ニーズ調査，(4)教室のデザイン（5）中心となる企業との合意形成，（6）関係者を集めた協議会の開催。

（深江―九州大学大学院生）

〔2024年度第 1 回支部集会（九州・沖縄支部）口頭発表②〕

日常談話における「こう」の多義性と意味・機能

鹿嶋恵・西村史子

一般に「こう」は副詞や感動詞に分類され，コソアドの体系の一部として指示的な機能も早くから指摘されている。一方，日本語学習者による「こう」の使用は多くなく，背景にその習得の難しさや，意味・機能の多様さ／複雑さが推察される。本研究では「こう」の多義性を解明すべく，現代日本語研究会（2016）の談話資料を元に「こう」の出現状況，および複数の意味・機能と関係性の分析を試みた。結果，2 点を示した。1) 全用例中約 4 割がいわゆる副詞の「こう」であり，うち 8 割を「こういう＋名詞」と「こう＋動詞」が占めた。2）いわゆる副詞の「こう」の意味・機能には，文脈指示，現場指示，観念指示、および拡張事例が確認できた。これらは話し手に近いと認識される対象を指し示す様子を表す点で類似し，これが中心義と考えられた。また複数の意味・機能は，中心義を起点とした意味拡張／希薄化によりネットワーク関係を成すことも見出された。

（鹿嶋―崇城大学，西村―ワイカト大学）

〔2024年度第 1 回支部集会（九州・沖縄支部）口頭発表③〕

地域の日本語指導体制づくりをめざした小学校と日本語教育の連携

小川佳子・樋口尊子

日本語指導が必要な児童生徒が増加している教育現場では，学校教員が手探りで個々の状況に対応している。そこで，日本語教育を専門とする研究者・教育者との連携によって児童生徒の学習支援に活用されることをめざした事業を教育委員会の協力のもと行った。

この取り組みでは，子どもへの日本語教育に興味があるがその経験がない，もしくは浅い日本語教育従事者を募集し，発表者らが児童生徒の日本語指導及び DLA に関する研修を行った。その後，DLA の実施，評価，日本語教育従事者と学校教員との協議が行われ,児童に応じた日本語指導（活動）案が作成され，教育現場で実践された。

その結果，多角的な視点から児童を幅広く把握することができ，児童が抱える困難の一因が見えてきた。また実践の場では学校教員と日本語教育従事者の専門性の融合が起こり，児童の生き生きとした活動につながった。このような取り組みの継続のために，地域の体制づくりが重要であろう。　(400 字)

（小川―大阪大学，樋口―大阪樟蔭女子大学）

〔2024年度第 1 回支部集会（九州・沖縄支部）ポスター発表①〕

言語教育観を深める日本語コースデザイン

－非母語話者日本語教師のための訪日研修での実践－

長坂水晶・清水まさ子

本発表では，多国籍の非母語話者日本語教師を対象とした訪日研修における，言語教育観を深めることを重視したコースデザインと，その実践に関する報告を行う。今回の実践は日本語科目の一つである「総合日本語」において行った。

コースデザインには CLIL の枠組みを用いた。各教師が自らの言語教育観－なぜ，どのように日本語を教えるのか，教えることは社会や世界とどのように関わるのか―を問い直し，コースが教師の社会的な役割を再考する場となるよう，様々な社会的トピックを扱った。研修参加者（10 カ国，11 名）は教授経験が少ない若手であったが，授業中の活動や，コースで導入した「一枚ポートフォリオ」からは「言語教育の意義や，教師の役割」を協働的・主体的に深く考える様子が観察された。最終タスクとした言語教育観についてのスピーチでは言語運用力の伸びに加え，言語教育に対する信念や目標を得たことが分かった。

（長坂―国際交流基金，清水―国際交流基金）

〔2024年度第 1 回支部集会（九州・沖縄支部）ポスター発表②〕

地域日本語教育の対話活動はどう捉えられているのか

―地域日本語教育の団体 X と日本語学校に通う A さんの語りから―

友宗朋美

本研究の目的は，日本語非母語話者の視点で捉えた地域日本語教育の対話活動の特徴や意義を明らかにすることである。団体 X の対話活動に 1 年間参加している A さんにインタビューを行い，継続理由および意識の変容を質的に分析した。その結果，〔友好関係を築くための日本語と文化的習慣習得の希望〕を持っており，〔強要されない対話〕を通して〔個人的意見の共有から相互理解に至る喜び〕，〔自文化紹介による新たな発見の喜び〕を経験していること，〔多様な他者との対話の積み重ね〕により〔友好関係拡大の実感〕や〔雰囲気からつくられる居場所感〕を強め，〔継続参加と学習の内的動機付け〕が生じていることなどが確認された。また，分析の結果，強要のない対話と雰囲気づくり，相互理解に至る過程の体験，自文化の新たな発見，友好関係構築の実感，同地域に暮らす参加者からの共感などが対話活動への継続的参加には重要であることが示唆された。

（友宗―筑波大学大学院生）

〔2024年度第 1 回支部集会（九州・沖縄支部）ポスター発表③〕

日本語学習者における受身と「～てしまう」の使い分け

―学習者独自の文法規則を考える―

黒田弘美

本稿は日本語中級から上級レベルの日本語学習者 55 名を対象に文法性判断テストを実施し，受身と「～てしまう」をどのように使い分けているのか，学習者が選択した解答から分析を行った。その結果，動詞の内在的な意味もしくは後件の文から事態が望ましくないことが読み取れる場合は，「受身」と「～てしまう」の二つに選択肢を絞る傾向があった。「褒める」「叱る」など動作動詞の直接受身は影響を受けた者に視点を置きやすく，助詞に注意を払いやすいため受身を選択することが考えられる。しかし，「入る」「壊す」など所有物の損失・消失などを表す変化動詞の間接受身は，影響を受けた者に視点を置きにくいため，受身ではなく「～てしまう」を選択することが推測される。また，テストの総合点数が高い学生ほど「～てしまって」を選択する傾向があったことから，学習者は変化動詞の間接受身と「～てしまう」を同じ意味で解釈していることがわかった。

（黒田―長崎外国語大学）

〔2024年度第 1 回支部集会（九州・沖縄支部）ポスター発表④〕

小中学校・地域日本語教室・日本語学校での日本語教育実習の比較

―大学での日本語教師養成の実態―

樋口尊子・松本理美

本発表では，A 大学における実習実例を取り上げ，日本語学校，小中学校，地域日本語教室での日本語教育実習の実習内容と実習日誌の振り返りに着目し，日本語教育実習の現状と課題を示すとともに，新制度下での実習の方向性について提案を行う。

日本語学校と地域諸機関の教育実習における実習生の振り返りには，すべての機関に共通した気づきや学びもあるが，各実習機関ならではの気づきも確認できた。日本語学校の実習生にはクラス運営や教授テクニックに関する記述が多く，小中学校・地域日本語教室の実習生には多文化共生や学習者の背景理解に関する記述が目立った。このような気づきは諸種の機関での実習が実現していればこそのものであり，学生，教員の成長にとって非常に重要である。新制度下においても，社会情勢，地域の実情に合わせた日本語教育と人材育成を進展させるべく，多様な実習実現の重要性と方向性について議論する。（388 字）

（樋口―大阪樟蔭女子大学，松本―大阪樟蔭女子大学）

〔2024年度第 1 回支部集会（九州・沖縄支部）ポスター発表⑤〕

実習生は日本語教師の役割や求められる力をどのように捉えたか

古川敦子・渋谷実希

本発表では，日本語教育実習で行った実習生に対する指導内容を取り上げ，その一連の活動を通して実習生が「日本語教師の役割や求められる力」をどのように捉えたかを考察することを目的とする。

発表者が担当した「日本語教育実習」の授業では，実習前に以下の3点をグループでの対話活動として実施した。

(1) 日本語学習者のケースを検討し，その課題解決に必要なことを，学習者の周囲の人々や学習環境への働きかけも含めて考える

(2) 日常生活のちょっと困った場面を提示し，その背景や要因を様々な立場や視点から多角的に検討する

(3) 学習者の背景やニーズを検討して，教壇実習で行う活動をデザインする

授業のまとめとして，日本語教師の役割・資質能力についてキーワードを図式化し，説明する課題を行った。図式化の中には「他分野とのつながりづくり」「協調性」「環境づくり」などの記述がみられ，社会の変革の担い手としての萌芽が示唆された。

（古川―津田塾大学，渋谷―津田塾大学）

公益社団法人
日本語教育学会
Association for Japanese Language Education

〔2024年度第 1 回支部集会（九州・沖縄支部）ポスター発表⑥〕

レベル別日本語書籍の普及活動

—公共図書館で所蔵する際の課題—

柴田あづさ・橋本直幸

近年，日本語学習者向けにレベル別に開発された幅広い話題の読み物が充実し，留学生のいる大学の図書館などで多く所蔵されるようになった。一方で，国内の公共図書館では，この書籍の所蔵が十分に進んでいるとはいい難い。そこで，筆者らはレベル別日本語書籍の普及活動を行い，学校司書らとともに公共図書館でこの書籍の所蔵が遅れている要因を検討した。その結果，この書籍がまだあまり知られていないことや，形状が公共図書館が所蔵を検討する際の妨げとなっている可能性があることがわかった。現在出版されている書籍の多くは，薄い冊子型で，背表紙にラベルを貼るなどの装備が容易ではない。紛失や破損により管理が困難になることも考えられる。冊子型は学習者には利便性が高いものの，図書館においては管理を複雑化させる。今後は，大学の図書館などの書籍管理の事例を集めて紹介し，公共図書館ごとに適した管理方法の検討を促すよう努めたい。

（柴田—九州大学，橋本—福岡女子大学）

※本研究は，共同研究者として川邊理恵氏（福岡大学）および古田三志氏（さくら日本語教室），米田留美氏（NILS Annex）の協力を得た。